

ニュー Yorker たちが挑む
未来インターフェイス

“ インターナショナル ブラウザーデー ” レポート

ブラウザー戦争が終焉して久しい。しかし、メディアアーティストが“ブラウザー”を手段に自分たちの考えを表現しようという試みがある。オランダで端を発した「インターナショナルブラウザーデー」の趣旨はまさにそこにある。第4回となったこのイベントは、海を越えてインタラクティブデザインのメッカ、ニューヨークで開催された。この場で紹介されたアーティストの自由な発想で作られる“ブラウザー”は、われわれが知りえることのない奇異な姿へと変容しているが、インターフェイスの飽くなき探求がそこに見て取れる。

取材・文 岡田智博
NJump coolstates.com



ウェブデザインが すべてではない!

「ウェブデザインだけでインターネットのデザインを極めたと思うな! それだけなら、ソフトメーカーの規格の手のひらで踊らされているだけだ。ブラウザーやインターフェイスからデザインできなければ、自由なデザインはできないだろう」

こんな挑発的なコンセプトのもと、プログラマーやデザイナー自身が作りだしたオリジナルのブラウザーや新しいインターフェイスのイメージを提案し合うイベントが、インタラクティブデザインビジネスのメッカ、ニューヨークでこの3月末に開催された。

真のインターフェイスを 目指す

1998年春、オランダ、アムステルダム。マイクロソフトとネットスケープが繰り広げたブラウザー戦争によるデスクトップ獲得合戦の前に憂えている人々がいた。もともと自由自在にデータをやり取りするためのメディアであったインターネットなのに、巨大ビジネスの産物であるブラウザーによってその自由さと創造力がなくなってしまうと。ならばユーザーの手に帰した自分たちのブラウザーを作ろう。その提唱のもと、世界中からオリジナルのブラウザーの作り手を集めるとともに、自分たちでもブラウザーを作り、提案し合おうというイベントが生まれた。これがこのイベントの発端である。

奇しくも最初の「ブラウザーデー」の準備を進めていた間の1998年4月1日に、ネット

INTERNATIONAL BROWSER DAY

スケープがモジラのソースコードを開放する。そこでこのイベントの第1回が同日に急遽開催された。このときはインターネットを通じて手に入れたばかりのソースコードをもとに個々のブラウザを即興で作り上げるブラックファーストミーティングというものだった。以降、大企業によって制限されたインターネット上のインターフェイスへのカウンターとなる“真のインターフェイス”を作ろうというクリエイティブキャンペーンのイベントとして存続し、毎年開催されている。

「ブロードバンド」「モバイル」といったインターネットを取り囲む環境が変化するなかで、ブラウザデーの概念はPCのデスクトップの上での葛藤であるだけでなく、新しいプラットフォームにおけるチャレンジそのものへと変貌していった。ソースコード開放への“キャンペーンの日”から“チャレンジをする日”と変化し、4回目となる今年は初めて海を渡り、3月25日にニューヨークのイーストビレッジで開催されることになったのだ。

ブラウザーそのもので完結しない

国際的なブラウザデーに先立ち、全米および過去の開催地であったオランダから、独自のブラウザを制作する大学院生を中心とした若手クリエイターたちが募集された。そのなかから25組がファイナリストとして選ばれ、3分間でそれぞれのブラウザをプレゼンテーションする。そしてそれをニューヨークのインタラクティブデザインの産・学・報道の第一人者たちによって構成された審査員団が審査する。最終的に優勝者と5組

の入賞者を決定させようというのがブラウザデーのメインイベントである。

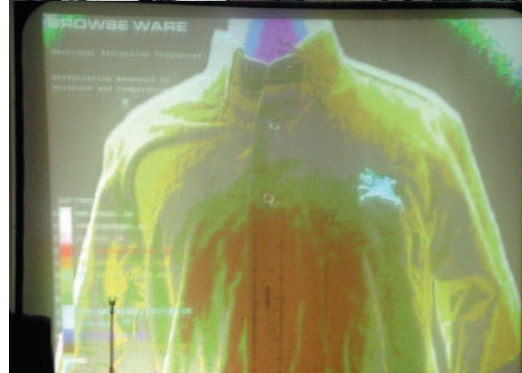
このプレゼンテーションで展開されるブラウザの基準は：

- ・オリジナリティーがある
- ・斬新な機能性と操作性を提案できている
- ・アイデアを興味深く伝えられるパフォーマンスをステージ上で展開している
- ・ビジュアルデザインの持つ圧倒的な「パワー」を忘れずにデザインされている
- ・情報の組み立て方に新しい側面がある
- ・デザインの「パワー」をより引き立てる存在としての音が効果的に使われている

というようなものとなっていた。このため、プログラムを組んで一から起こしたオリジナルのブラウザだけでなく、ブロードバンドやIPv6時代のブラウジングのイメージをCG映像で見せたり、マウスやパッドに替わるブラウジングのためのデバイスとして、レコードのターンテーブル状のものや手漕ぎ車状のものを作っていたり、はたまた「人間をブラウジングします」とでもいうようなダンスパフォーマンスがあったりと多種多様な内容となっていた。

ブラウザーそのものだけを見せ合うイベントを想像してしまうと理解に苦しんでしまうが、実際にはブラウザをネタに発想力を競い合い、それを具体的に見せるという、インターフェイスを考えるうえで刺激になるアイデアに溢れていた。

では早速、ニューヨーカーたちのブラウザに対する創造（想像）力を見てみよう。



気になるユニークな「ブラウザー」たち

ここでは筆者が特に興味を持った「ブラウザー」の受賞作品を紹介しよう。

手で漕ぐとデータがロードされるブラウザー

大賞を獲った手漕ぎブラウジングデバイスの『クランクウェブ』。デスクトップ上の専用インターフェイスにURLを入力して自転車のペダルのような手漕ぎ車を手でくるくる回転させると、デスクトップに起動させてある任意のブラウザー上にデータが読み込まれる仕掛けとなっている。これを作ったジョナ・ブルッカー・コナンは、ニューヨーク大学のインタラクティブテレコミュニケーション専攻を修了後、遊び心のあるインタラククションを実現す

るデバイスの開発をする仕事に打ち込んでい
る最中とのこと。ブルッカー・コナンの仕事
は下記のURLで見られる。

 www.coin-operated.com



スクラッチしてページをナビゲートするブラウザー

これは手漕ぎならぬ、スクラッチングデバイス。まるでレコードのターンテーブルのようなものを持ち出すのは、アムステルダムのアートスクール、サンドバーグインスティテュートの大学院生のロエル・ワルター。USBプラグが付いているこのターンテーブルの名前は『スクラッチマシン』。これをPCに挿してショートタイム。まずはDJよろしくウェブページをスクラッチする。すると手漕ぎブラウザーのように、今度はウェブページがナビゲートされてゆく。次にワルター、ムービーファイルを開いてスクラッチ。スローにリバーズ、それに画像のミックスと、スクラッチに合わせて小気味よく変化する。「これでスクラッチして、ザッピングすることで読みたいニュースだけを見られるんだ。自分だけのニュースショーさ」とプレゼンテーションし、会場から歓声を引き出す。すでにデバイスを作ってしまったワルターに次に何をするのかと聞いたら「このスクラッチマシンを使って操作するドキュメンタリーフィルムの制作にこれから入る予定。スクラッチマシンとそれに合う作品の制作で修士研究をまとめる」とのこと。



INTERNATIONAL BROWSER DAY

アートとしての“ブラウザ”

独創的なブラウザから、デバイスやインターフェイスデザインのプレゼンテーションまで、甲乙つけがたい特徴を持った作品が受賞作品として選ばれた。そのなかで大賞として選ばれたのは、手漕ぎブラウジングデバイス『クランクウェブ』を作ったジョナ・ブルッカー・コナン。評価された点は、手で漕ぐことでブラウザにデータが読み込まれるように動作するデバイスを完成させていること、漕いでページを表示するデモンストレーションがユーモラスでとても楽しめるデバイスであるところだった。

今回のブラウザデーでファイナリストに残ったほとんどのクリエイターは、地元の東海岸からとブラウザデー発祥の地のオランダからであったが、総じてオランダ勢のほうが東海岸のクリエイターよりも洗練されたプレゼンテーションを繰り広げ、面白味があった。これだけでなく、インターフェイスとしてのデザインやアイデアもオランダの水準が高く、その差は際立っていた。この理由として「ドットコムビジネス真っ盛りで、学生が即戦力となる

ような表現方法だけを学んでいる状況にあるニューヨークでは、デザイナーもプログラマーも創造的な表現を養うことが難しくなっている」とブラウザデー取材に来たニューヨークでインタラクティブデザインを教えるアムステルダム出身のテッド・バイフィールドは分析する。彼は「アムステルダムのアートスクールでは、機材はニューヨークと比較すると充実していないが、アーティストとしてどう表現するかを叩き込まれる。このため学生たちは彼らが表現したいものに必要すべてを吸収しなければならぬ。したがって、作品を1つのかたちにして仕上げることに慣れている」とニューヨークとの違いを語る。

来年は日本開催へ

この国際的なブラウザデーはニューヨーク開催の後、今年の秋にアムステルダム以外のヨーロッパでもっともインターフェイスデザインが盛り上がっているベルリンで初の開催が決まっている。そして来年の春を目標に日本での開催を決定し、現在、開催パートナーを探している状態にある。

「モバイルやビデオゲームなどの新しいハードインターフェイスを生み出すとともに、独自のハイテクカルチャーを持つ日本で、新しいインターフェイスの可能性を見出すのは世界的に見ても注目に値する刺激的なイベントになる」と国際的なブラウザデーの創始者の1人で現プロデューサーである、アムステルダム在住のデザイナー、ミカ・ヘリツェンは日本への期待を語っている。

日本開催に関する問い合わせは筆者まで
okada@coolstates.com

国際的なブラウザデー
www.internationalbrowserday.com



蜂の巣状の幾何学パターンで 情報を整理するブラウザ



六角形のサムネイルを関連情報別に蜂の巣状に組み合わせて見せる情報整理型のインターフェイスを作ったのは、ニューヨーク大学イ

ンタラクティブテレコミュニケーション専攻の大学院生、ノア・ヘンドラーとトッド・ハロベック。このIndraというブラウザは探したい情報のキーワードを打ち込むと、それに合ったファイルやサイトをテキストやイメージ、オーディオファイルというかたちで抽出して六角形のサムネイルでプレビューさせるというもの。ユーザーはその六角形を組み合わせながら、自分が求めている情報を整理してナビゲートするという、サーチエンジンと情報整理ツールの側面を持ったブラウザである。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp